

戸破の歴史を訪ねて

越中国対水郡戸破村ノ事ナド (その三)

(一) 旧北陸道を西(三ヶ)から東(戸破)へ向かって進むと中町の中程、老田家の前で、左へぼゞ直角に曲折し、更に久証寺前で鍵の手に右へ折れている。茶屋町から下条川を渡って荒町通りのつきあたり、旧杉森商店の前で左へ折れ、すぐまた右へ屈曲している。

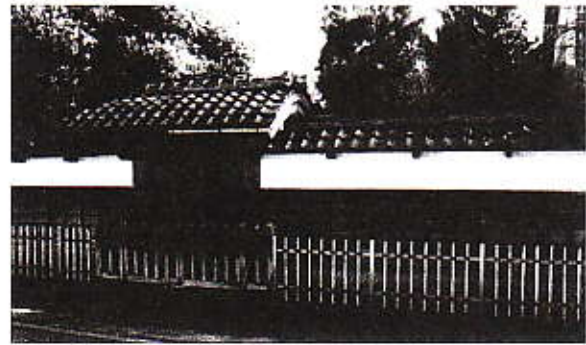
さらに、乗舟から西楠町、鍛冶屋橋、末永町、北手崎、手崎、手崎加茂社前から願海寺へと出る旧「とやま道」の道筋も蛇行しており、現代の車社会においては、ドライバー泣かせの町並みになっている。

この曲折は、江戸時代、小杉新町の町立てに際し、加賀藩が、あえて、町並みを屈曲させ、遠くを見通せない「遠見遮断」にしたものともいわれ、敵の攻めに備えたものといわれている。兵どもが、辻陰に待ち伏せし、辻角に敵が現れたところを一気に討つて出る心算であつたのであろうか。

加賀藩三代藩主前田利常が、長男光高を加賀本藩の四代藩主とし、加賀藩を分藩して、次男利次を富山藩主(十萬石)に、三男利治を大聖寺藩主(七萬石)としたのも、徳川への配慮から、加賀藩百二十萬石を少しでも小さく見せるためともいわれているが、藩の一部を次・三男に分け与えるとともに、東と西からの敵の攻めに対する加賀本藩を守るための戦略上の備えをしたものでなからうか。

また、佐々成政が、秀吉の攻めに抗しきれず、その軍門に降った時、治めていた越中のうち、新川郡のみを与えられたのも、東からの攻めに備えて、成政をその最前線の防波堤としたものではないか。

敵の攻めに対する備えという面において、小杉新町の「遠見遮断」の町並みづくりと相通するものがある。

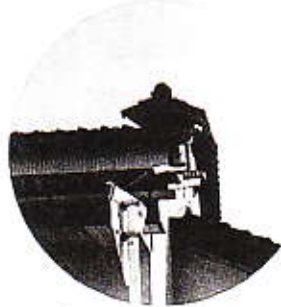


老田家 (旧藻谷家)

(二) 中町の老田家の建物は、旧藻谷家(町方組合頭、のち算用聞役)が所有していたもので(その後一部改造)江戸時代には、この辻角に加賀藩の高札場(幕府や藩の禁制や達しを広く知らせるため町の辻角など通行の中心地に掲示した板札)があつたと伝えられている。

また、老田家の屋根には、税(うだつ)が上がり、それはまた財力の誇示でもあつた。もとより、庶民には税を上げる財力がなく文字通り、うだつが上がらなかつた立身できない、思う存分活躍できないことを、うだつが上がらないということが、富裕な家でなければ税(うだつ)が上げられないことから転じたものという。

さらに、老田家には、江戸時代、荒町のつきあたり、木舟町にあつた加賀藩の「備荒倉」(飢饉に備えて米を蓄えた倉)の「額」が保管されており、久証寺の茶室「如是庵」は老田家から譲られた旧藻谷家の茶室である。



老田家 (旧藻谷家) 屋根の税(うだつ)

(温井喜彦・富山県郷土史会会員)